

2005 年度卒業論文紹介

1. 柚木 尚

思想の違いが現れる文体の違い —— 演説文の文体論による分析 ——

言語は人間の思考を表す道具である。そんな考えを持っていた私は、送り手の思想の違いが果たしてその文体に影響を与えるのだろうかという疑問を持っていた。その違いを見つけ出すために、思想や政治的背景の異なる三人の政治家の演説を比較し、その文体的特徴をとらえようというのが、本論の趣旨である。

資料に演説を選んだのは、演説文が送り手の思想を伝達することを第一義としていると考えたからだ。今回選択した演説は、アデナウアーの首相就任演説、ウルブリヒトによる講演演説、ヴァイツゼッカーのドイツ統一式典での演説である。これらを比較分析し、各々の文体的特徴を抽出しようと試みた。

文体とは個々の現象だけでなく、様々な要素が作り上げる総合的な結果である。そこで、個人の具体的な文体の特徴をどこに見出せばよいのかという疑問が浮かぶ。他に比べて特異な点だけが文体であるという見解は一面的であるが、結局は特異点に文体的特徴を見出さねばならなくなるのではないか。そうなれば特異点を判断する基準に観察者の主観が入り込むことは想像に難くない。それを防ぐため、今回の分析では比較という手段を用いることにより判断基準に主観を混ぜないように試みたのである。

具体的な分析の段階では、まず語彙、文法、文構成と大きなカテゴリーを作り、さらに個々の項目を設定し各々の演説からデータを集めた。語彙の分野では、呼びかけ、特定のものに対する呼称方法、頻繁に登場する動詞、比較級・最上級の割合、副詞表現、否定詞について調べた。文法では、時制の用法、助動詞の使用率、接続法、関係代名詞節、zu不定詞句の用法についてデータを拾った。文構成の分野では、副文の

出現率、挿入文の割合、引用文、主語、全体的な文構成について調べた。最終的にそれらを比較し、どういったものが演説者の文体的特徴であるかを特定することを目指した。

その結果、アデナウアーの演説では以下のような特徴が見つかった。

すなわち特定のものに対する呼称が極めて簡潔であり、動詞に関しては他者に比べてseinの使用率が飛び抜けて高く、三者間では最も名詞文体的であるといえるものであった。また、他の演説では見られない、副文の中に副文を伴うような複雑な構文が多く、副文の数も最多であった。

ウルブリヒトの演説で見られた文体の特徴は、客観的表現に留まらない名詞の使い方、文成分や文レベルで多用される繰り返しの技法、そして、過去形の多用である。この過去形の多用は、選択したテキストの一部の分析であることを考慮した上でも、演説という形式においては送りの特別な意図を感じさせる重大な特徴であるといえるだろう。

最後にヴァイツゼッカーの演説では、まずsein動詞の数が最も少なく、三者の中では最も動詞文体的であるといえる。また副文、関係代名詞節、zu不定詞句が最も少なかった。比較級や接続法を用いた表現も最も少なかった。さらに文成分レベルの繰り返し、特に動詞の並列配置が目につく。これらの点で、アデナウアーとは対照的である。

以上のように、思想の違いが現れるテキストの文体的特徴を見つけることができた。またその分布を見てみると、文体の特徴は決まったカテゴリーに出現するのではなく、様々な部分に様々な特徴として少しずつ現れるということが確認できた。これは、文体論がいかに広範で複雑なものであるかをうかがわせるものであろう。

今回設定した項目が十分であるとはいえないが、少しでも思想の違いが現れるテキストの文体的特徴を見出せたことは幸いである。

2. 世古 朋世

doch の分類

日常会話の様々な場面で doch が使われているのを耳にした。なぜ、こんなにも頻繁に doch が使用されるのだろうかという疑問を持ち、その doch にはどのような役割があるのだろうかという思いからこの研究が始まった。そこで、doch の意味や機能について 7 つの辞典と、2 つの文法書の記述を検討した。

1. Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm. Leipzig 1860 : 逆接の副詞と逆接接続詞に位置づけている。しかし、副詞と接続詞の明確な用法の区別はされておらず、意味的な分類のみ行っている。
2. Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm – Neubearbeitung-. Leipzig 1978 : 接続詞と副詞に分類している。ここでは制限、認容も機能の一つとしている。副詞には、発話を確認あるいは強調する機能、およびすでに述べられた否定を肯定する機能を盛り込んでいる。
3. DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 1999 : 接続詞、副詞、不変化詞の 3 つの品詞に分類している。話し手の感情を表すか表さないかで副詞と不変化詞を区別している。
4. 岩崎／小野寺編『ドイツ語不変化詞辞典』白水社 1969 : 副詞と話し手の感情を表す心態詞の区別がない。
5. 岩崎英二郎編『ドイツ語副詞辞典』白水社 1998 : 副詞と心態詞の区別がない。Ich möchte gern kommen, doch habe ich keine Zeit. のように、文頭におかれその後ろに定動詞を置く doch を意味的に接続機能を持った副詞的接続詞と名付けている。
6. 国松他編『独和大辞典』小学館 2000 : 接続詞と副詞に分類される。その分類を文構造から判断している。副詞と心態詞の区別はされていない。
7. 川島淳夫編『ドイツ言語学辞典』紀伊国屋 1994 : 心態詞の定義と分類がある。副詞と心態詞の区別がない記述について疑問を投げかけるものである。

8. Ulrich Engel: Deutsche Grammatik –Neubearbeitung–. München 2004: 副詞に分類されていない。一般に副詞とされる doch は心態詞に分類されている。
9. Duden Die Grammatik. 2005: Möchtest du keine Suppe mehr? – Doch. のような doch を返答詞として位置づけている。Er fährt gerne Auto, doch nimmt er ungern das Flugzeug. のように文の前域で使われた doch を接続詞的副詞と名付け、構造上は副詞と判断する。しかし、純粹な副詞には分類されていない。

以上の辞典と文法書の記述を検討した結果、まず副詞と接続詞を明確に区別したい。逆接の副詞は接続詞的機能を持っており、文頭に置かれた場合、意味的には接続詞と同じ働きをする。しかし、文法的構造から「doch 動詞 主語」の語順のものを副詞、「doch 主語 動詞」を並列の接続詞に区別する。

副詞は意味的に、以下のように分類した。

- 1) 文頭・文中で逆接の意味を持つ
- 2) 文頭・文中で認容・制限の意味を持つ
- 3) 述べたことの原因を示す
- 4) 否定詞を含む問い・否定の答えを期待されている問いの答えに用いられ、肯定の返答をする
- 5) 肯定、否定を強調する
- 6) 発話内容を強調する

次に、心態詞と副詞を区別する。話し手、聞き手の心態的態度を表す、あるいは2人以上の人に対して既知の事柄を話す場合に用いられる doch を心態詞とする。心態詞の機能として以下のものが挙げられる。

- 1) 話し手・筆者の感情を表し、その感情を強調する
- 2) 話し手が自分の予想を確かめる時や確実性をもてない時に用いられる
- 3) 決定疑問文で、相手から肯定の返事を期待する
- 4) 相手がすでに知っている発話で用いられる

doch の様々な意味や機能を調べることを通して、語には人々の様々な思いが込められていることを改めて感じるとともに、一語一語がそれぞれの場面で重要な意味を持つことを再認識した。

3. 塚本 武人

ドイツの本質と二元論

— Thomas Mann „Deutschland und die Deutschen“から考える —

近代から現代にかけてのドイツを代表する多くの知識人、芸術家ら表現者達は一様にその作品を通じてドイツが抱える特異で複合的な諸問題についての問題提起を行ったが、作家のトーマス・マンはその事業の最後の継承者と言ってよく、彼がナチス・ドイツの降伏直後1945年5月29日に米国・ワシントンで行った講演「ドイツとドイツ人」では、長年に渡ってドイツの歩みをメタレヴェルで見つめ続けてきたマンの祖国に対する文化観、総括的考察が、簡潔な要点を衝いた構成で示されている。

本論文では、マンの「ドイツとドイツ人」に準拠する形で、近代のドイツ国家を宿命的に取り巻き循環的に顕在化する「二元的分裂」という負の側面と、根底で関連するドイツ人の民族性、そしてドイツが特有に抱える様々な歴史的負債について考察した。

序章では、第二次大戦の敗戦によってドイツ国家が破綻の時を迎え、同時に世界情勢の決定的な転換点となった時期に、講演「ドイツとドイツ人」を行ったマンの政治的表現者としての背景について述べ、また「二元論」という言葉で表現したドイツの歴史、精神に深く関与した本質的問題を「ルターのドイツ」と「ゲーテ的ドイツ」の分裂、相克という構図に象徴させて、後の各章で詳述する諸問題への伏線とした。

第1章では、マンが「アンバランス」という言葉で形容した「ドイツ」と「政治」の関係について問題提起を試みた。つまり、その歴史において、穏健で複合的な合邦体制下で政治的現実に向き合う機会を得ないままにドイツ人の美德としての観念論的傾向を深化させ、内面的精神主義に拘泥し続けた影響が、歴史的負債としてのドイツ人社会における伝統的な非政治的傾向として浸透し、国家としての政治的資質の向上、有機的生成に対する障害となった点について述べた。

第2章では、「独特な倒錯」の基に成り立った「ドイツ」と「自由」の関係を、第1章と連続性を持たせた上で解説した。つまり、ドイツ人の政治感覚が、極めて「ドイツ的」な人物である宗教改革の指導者ルターによる強い影響を受けて二元的分裂を生じ、その結果がこの章で述べる

「自由」に対する認識の不幸な分裂にも繋がったということである。

第3章では、ドイツ的本質が生んだ最大の文化的結晶であり、ドイツ人の精神世界を世界に向けて最も雄弁に伝える役割を果たした「音楽」について、また、そのドイツ音楽に象徴される一種の誇大妄想的英雄志向がドイツの内面的観念主義やナショナリズムと結びつき肥大化し、結果的にドイツ人の運命を破滅に導く「悪魔」を生み出したのだ、と述べた。

第4章では、これまでに取り上げた諸問題が克服されないまま、初めて近代的統一国家となった「ドイツ」のもとで決定的に顕在化し、その余波が「世界」という外部に向けて「戦争」という形で奔流となって溢れ出る過程について述べた。こうして、二度の世界大戦を引き起こし、「戦争の世紀」である20世紀の幕開けにおける主役を演じたドイツは国家の解体を余儀なくされ悲劇の分断を迎える。

終章では、あまりに複雑な生成の歴史を持つ「ドイツ」の定義について改めて考えるとともに、今回着目した諸問題を総括して「ドイツ的本質」とは何か、という結論的考察を試みた。

講演「ドイツとドイツ人」はドイツが「世界の敵」として崩壊の時をまさに迎えたその時に為されたものであり、マンの主張には、祖国を破滅に向けて先導したナチズムに対する激しい憎悪に駆られるあまり、時に熱がこもりすぎ、より検証的で多角的な歴史認識が一般化しつつある今日では明らかな温度差や違和感を感じざるを得ない面もあるのは事実である。今回はそのマンの主張に敢えて準拠する形での考察を進めた為、オリジナルな検証論証があまりに不十分であり、今後の課題としたい。